

《血清タンパク X の膵癌バイオマーカーとしての有効性》

＜本発明の概要＞

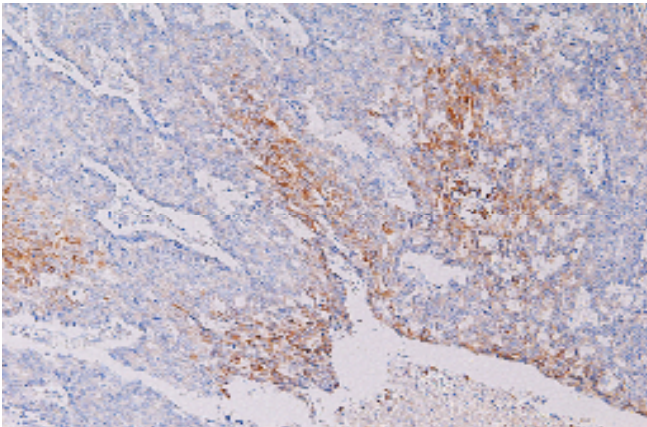
膵癌は発見が困難であり、かつ、進行速度が速く、発見されたときには治療困難であることが多い難治性がんの一つである。血清タンパク X を測定することにより、膵癌のスクリーニングマーカーとなる可能性を見いだした。

＜従来技術の問題点＞

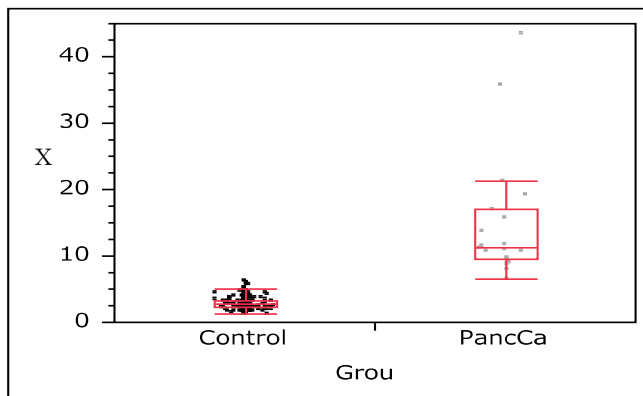
膵癌は血清腫瘍マーカーCA19-9の上昇、腹部超音波検査、腹部CT検査などで診断されるが、検診にて腫瘍マーカーの測定は行っておらず、腹部CTも通常の検診では行われていない。腹部超音波による膵癌の診断は感度が低く、早期診断は困難である。CA19-9も必ずしも膵癌で上昇せず、スクリーニングとしての感度、特異度は十分なものではない。今回発見した血清タンパク X の測定が膵癌のバイオマーカーとなれば、膵癌の早期発見、CA19-9が上昇しない膵癌の趨勢をみる検査として貢献は大きい。

＜本技術のポイント＞

正常膵組織、膵癌組織にタンパク X の免疫染色を施したところ、正常膵組織にはタンパク X は存在せず、膵癌組織20例中18例で存在した。(図1)



非担癌者269名、膵癌患者19名の血清タンパク X を比較したところ、有意差を持って膵癌患者で高値をしめした。19名のうち7名ではCA19-9の上昇はなかった。(図2)



以上より、血清タンパク X は高感度な膵癌スクリーニングマーカーとして活用でき、膵癌の早期発見に貢献する。

＜発明者＞ 東京大学・医学部付属病院 野村 幸世

＜お問合せ先＞

株式会社 東京大学 TLO (CASTI) 鈴木 和哉(すずき かずや)

TEL: 03-5805-7664 Email: suzuki@casti.co.jp HP: <http://www.casti.co.jp/>